

# 待兼山俳句会

第六百九十一回

世話人

山田安廣・鈴木輝子・寺岡 翠・根来眞知子  
東中 乱・向井邦夫・森 茉衣

令和六年八月十九日（月）

会場 大阪倶楽部 会議室

締切 午後二時

出席者

瀬戸幹三・山戸暁子・上田恵子・小出堯子・鈴木輝子・鈴木兵十郎・東中 乱・東野太美子  
向井邦夫・森 茉衣・山田安廣

投句者

碓井遊子・寺岡 翠・中村和江・西川盛雄・根来眞知子・平井瑛三

出席者十一名＋投句者六名 計十七名 なお、朱美・かな子・言成・真理の諸氏は選句のみされる。

兼題

カンナ・蛸（幹三） 南瓜・茗荷の花（暁子）

当季雑詠 通じて八句

次回

例会 令和六年九月九日（第二月曜日）会場 大阪倶楽部会議室 締切 午後二時

兼題 蝨（蝨斯も可）・梨（幹三） 夜長・葛の花（暁子） その他当季雑詠

選者吟

とほざかるやうに蛸鳴きやみぬ

幹三

日の高くカンナと私だけの道

ぐあらごろと廊下転げる南瓜かな

くつろぎて南瓜煮てゐる女かな

暁子

座りよき南瓜どこか妻に似て

入れし刃の今度は抜けぬ南瓜かな

## 幹三 選

座りよき南瓜どこか妻に似て  
ひと日なる茗荷の花の薄明り  
◎かなかなが窓から風に乗って来る  
忘れてもよきことばかり茗荷咲く  
踏切の音に揺れ出すカンナかな  
蛸をこだまと聴くや谿の宿  
朝の散歩夫婦そろうて木槿垣  
日のめぐみずつしり詰めて大南瓜  
ひとしきり蛸鳴いてそれつきり  
錦市場笑うておじやる京南瓜  
◎くつろぎて南瓜煮てゐる女かな  
◎蛸や株暴落の一と日暮る  
蛸よ何ひつかかるその鳴きやう  
◎ごろごろり南瓜畑の空青し  
蛸や峪の奥より誘ひぬ  
清まし汁茗荷の花を浮かべけり  
◎身と枝を揺すり熊蟬今を鳴く  
ひぐらしの啼いて昨日と違う今日  
体操に子供ら急ぐ花木槿

暁子  
兵十郎  
茉衣  
輝子  
恵子  
兵十郎  
茉衣  
太美子  
輝子  
瑛三  
暁子  
瑛三  
乱  
安廣  
兵十郎  
堯子  
乱  
真知子  
茉衣

蛸や宿の媼の皺深し  
花茗荷じつと眺むる箸の先  
かなかなや空を拡げてゆきにけり  
つい箸を伸ばす南瓜の炊いたんに  
入れし刃の今度は抜けぬ南瓜かな  
◎畑から南瓜かざして持つてけと  
◎降り足らぬ土のほひや夕立過ぐ  
しよぼき我に活を入れたり黄のカンナ  
一番果そつと藁敷くかぼちやかな  
反物をほどき干す昼朱のカンナ  
車ならと南瓜三つ賜りぬ

安廣  
茉衣  
太美子  
乱  
暁子  
真知子  
太美子  
邦夫  
堯子  
和江  
暁子

## 幹三 特選句講評

・かなかなが窓から風に乗って来る 茉衣  
さらさらつと作られた句と思いましたが。そのことが蛸の鳴き声、それを聞いている環境の雰囲気をよく表しています。  
現代仮名遣いもよく合います。  
・くつろぎて南瓜煮てゐる女かな 暁子  
湯氣を立てている鍋がくつろぎなのか、やるべきことを終

えたくつろぎをもつて調理しているのか…。懐の広い句。南瓜とくつろぎは新鮮な取り合わせでした。

・ 蛸や株暴落の一と日暮る

瑛三

人にとっては大事件であるかも知れませんが、その一日も「かなかなかな」と同じように暮れて行きます。「ひぐらし」という意味合いもいい仕事をしています。

・ ごろごろり南瓜畑の空青し

安廣

南瓜らしいのんびりとした世界。絵本の一節のようでもあり、下から見上げて撮影された明るい写真のようでもあります。一句目と同様「俳句は軽み」です。

・ 身と枝を揺すり熊蟬今を鳴く

乱

身を揺するという措辞は観察の眼の成果ですね。限られた時間を一心不乱に生きる蟬たちの表現ですが、実は我々のことをも言っているように思えました。

・ 畑から南瓜かざして持つてけと

真知子

畑からキュウリやトマトをもらう句は時々見かけますが、

この句は南瓜らしいですね。南瓜をかざしている農夫の顔や人柄、その日の天候まで推し量れます。

・ 降り足らぬ土のにはひや夕立過ぐ

太美子

土においては夕立の予感としてよく詠まれますが、夕立の後のにおいは新鮮。もうおしまい？と見上げる作者の視覚に嗅覚が加わって一句となりました。

## 暁子 選

忘れてもよきことばかり茗荷咲く

輝子

◎ 踏切の音に揺れ出すカンナかな

恵子

◎ カナカナの鳴く夕闇を呼ぶやうに

輝子

図書館を出て蛸のシャワー浴び

盛雄

南瓜煮る母不味さうに食ぶる父

輝子

カンナ咲きラジオの玉音途切れ途切れ

瑛三

◎ ごろごろり南瓜畑の空青し

安廣

いま一度と心煽らる花カンナ

太美子

◎とほざかるやうに蛸鳴きやみぬ

波寄せて引くがごとくになかなかなや

蛸のひとときわ帰路の無言館

近頃は半分を買ふかぼちやかな

茜雲褪せて蛸鳴き納む

茗荷の子ここに居るよと白き花

かなかなの鳴きやむ時が好きと言ふ

◎乾きたる大地カンナの猛き色

ひとしきり蛸鳴いてそれつきり

◎夕暮の蛸時に音色変ふ

焼夷弾の残骸跡の南瓜かな

廢線となりし駅舎や赤カンナ

反物をほどき干す昼朱のカンナ

カンナ燃ゆナチス追放画家館

南瓜の成長速し日々激写

カンナの緋大気燃え立つなかで揺れ

蛸鳴く悲しきほどに透き通り

幹三

堯子

和江

恵子

輝子

堯子

幹三

安廣

輝子

邦夫

邦夫

兵十郎

和江

翠

輝子

眞知子

輝子

## 暁子 特選句講評

今日の句会では皆さんが蛸に対して感じておられる様々な思いが詠まれ、興味深かった。その中から三句選んだ。

・カナカナの鳴く夕闇を呼ぶやうに

輝子

「カナカナ」は俳句の場合は片仮名より平仮名の方が、視覚的によいと思う。夕方になると鳴くのではなく、鳴いて夕闇を呼ぶという。

・とほざかるやうに蛸鳴きやみぬ

幹三

歳時記などの例句を見ても蛸と「遠ざかる」は相性がよいようであるが、遠ざかるように鳴きやむというのは新しい感覚だと思う。

・夕暮の蛸時に音色変ふ

邦夫

よく聴いていると音色を変えるのですね。作者の発見。

・ごろごろり南瓜畑の空青し

安廣

よく見かける田舎の平凡な風景だが、普通は「ごろごろ」と

と表現するところを「ごろごろり」というオノマトペを用いて、少々滑稽味を出し、しかも明るい空をもつてこれ、楽しい句になった。

・乾きたる大地カンナの猛き色

安廣

炎天下のからからの地面にカンナは勢いよく咲いている。花の強さを「猛き色」で表現された。

・踏切の音に揺れ出すカンナかな

恵子

カンナは線路沿い、それも踏切の近くでよく見かける。電車がまだ通っていないのに、踏切の遮断機がかんかんかと音をたてると、その音にすでに揺れ出すカンナ。

## 互選三句

朱美 選

座りよき南瓜どこか妻に似て

暁子

忘れてもよきことばかり茗荷咲く

輝子

畑から南瓜かざして持つてけと

眞知子

（近所さんがこんな関係のところに住みたいな。）

## 瑛三 選

とほざかるやうに蛸鳴きやみぬ

幹三

尼寺のほまちにひそと花茗荷

太美子

喜寿にしてまだ夢もありカンナ燃ゆ

堯子

意気や壮。がんばって下さい。夢は「夢の」とすべき。

## 和江 選

香り立つ妻の遺せる花茗荷

瑛三

とほざかるやうに蛸鳴きやみぬ

幹三

南瓜煮る母不味そうに食ぶる父

輝子

女の好む南瓜、実は男も好きなんです。

## かな子 選

忘れてもよきことばかり茗荷咲く

輝子

蛸の名残惜しげに鳴き止みぬ

乱

車ならと南瓜三つ賜りぬ

暁子

賜ったのが南瓜しかも三つというおかしみ。

## 邦夫 選

とほざかるやうに蛸鳴きやみぬ

幹三

清まし汁茗荷の花を浮かべけり

堯子

廃屋の隅に今年も花カンナ

恵子

生家の庭に今年も咲くカンナは老いを励ましてくれる。

惠子 選

齒莖もて大和南瓜を食ふ齡  
蛸をこだまと聴くや谿の宿  
喜寿にしてまだ夢もありカンナ燃ゆ  
私もそのように生きたいと思っています。

兵十郎  
兵十郎

堯子

言成 選

針戻す日本時間や秋の虹  
臈長けし茗荷の花や尼の寺  
とほざるやうに蛸鳴きやみぬ  
蛸の鳴声を上手く写生しておられる。

遊子

恵子

幹三

堯子 選

かなかなや空を拵げてゆきにけり  
焼夷弾の残骸跡の南瓜かな  
ひと日なる茗荷の花の薄明り  
薄くて可憐で一日で枯れる花の様子を美しく表現された。

太美子

邦夫

兵十郎

太美子 選

かなかなの鳴きやむ時が好きと言ふ  
忘れてもよきことばかり茗荷咲く  
蛸のひときわ帰路の無言館  
沈黙の祈りの館と鳴きしきる蛸。蛸に託した作者の思い。

幹三

輝子

和江

輝子 選

入れし刃の今度は抜けぬ南瓜かな  
捨て土に育つ南瓜名を太郎  
ごろごろり南瓜畑の空青し  
収穫の近い南瓜畑。ほつと一息、見上げる空が真つ青。

暁子

和江

安廣

兵十郎 選

日の高くカンナと私だけの道  
蛸のひときわ帰路の無言館  
かなかなや空を拵げてゆきにけり  
蛸の声を聴くと本当に空の拵がつて行く景色が見える。

幹三

和江

太美子

茉衣 選

蛸や梢に遠き夕日かな  
日のめぐみずつしり詰めて大南瓜  
廃屋の隅に今年も花カンナ  
廃れた暗い家と活き活きと咲く明るい花の対照が絵画的。

安廣

太美子

恵子

眞知子 選

尼寺のほまちにひそと花茗荷  
日の高くカンナと私だけの道  
入れし刃の今度は抜けぬ南瓜かな  
確かに南瓜を切るには力も注意も必要です。

太美子

幹三

暁子

真理 選

カンナ咲きラジオの玉音途切れ途切れ  
瑛三  
濡れ縁の二人は無口かなかなや  
恵子  
放物線やがて消えたる蛍かな  
遊子  
蛍の光の軌跡の描写が素晴らしいです。

翠 選

いつか死ぬとガザの少女や燃ゆカンナ  
和江  
蛸のひとときわ帰路の無言館  
和江  
喜寿にしてまだ夢もありカンナ燃ゆ  
堯子  
いつまでも夢をの気持ちに赤カンナに託して。

盛雄 選

ごろごろり南瓜畑の空青し  
安廣  
日の高くカンナと私だけの道  
幹三  
蛸をこだまと聴くや谿の宿  
兵十郎  
蛸の鳴き声がこだまのように響く谿間の一時に心安らぐ。

安廣 選

座りよき南瓜どこか妻に似て  
暁子  
日のめぐみずつしり詰めて大南瓜  
太美子  
蛸をこだまと聴くや谿の宿  
兵十郎  
蛸の声の抑揚をこだまに比喩された。大変実感がある。

遊子 選

蛸をこだまと聴くや谿の宿  
兵十郎  
一番果そつと藁敷くかぼちやかな  
堯子  
蛸のひとときわ帰路の無言館  
和江  
蛸の鳴く声は無言館の戦没画学生を悔やむかのように響く。

乱 選

太陽に挑むがごとくカンナ咲く  
暁子  
南瓜煮る母不味さうに食ぶる父  
輝子  
濡れ縁の二人は無口かなかなや  
恵子  
饒舌かなかなと無言の二人。何があつたのか。

## 参加者自選句

カンナ咲きラジオの玉音途切れ途切れ	瑛三
反物をほどこき干す昼朱のカンナ	和江
受粉せし南瓜に土の付かぬやう	邦夫
たっぷりの南瓜カレー妣好み	恵子
喜寿にしてまだ夢もありカンナ燃ゆ	堯子
日のめぐみずつしり詰めて大南瓜	太美子
カナカナの鳴く夕闇を呼ぶやうに	輝子
蛸をこだまと聴くや谿の宿	兵十郎
禅寺や蛸の声道を説く	茉衣
蛸の声胸に落ちゆるぶもの	眞知子
カンナ燃ゆナチス追放画家館	翠
図書館を出て蛸のシャワー浴び	盛雄
蛸や宿の媼の皺深し	安廣
時刻む水琴窟や夏座敷	遊子
花待たず茗荷刻まれお小皿に	乱

## ひとこと

山田安廣

相変わらず残暑が厳しい事でございます。皆様方お変わりありませんでしょうか。

今回出席者が例会席上で「短冊」に書かれた句と選句用にGoogleフォームで提出された句が一致しないケースが四件ありました。このようなミスを防止するため輝子さんに全員の短冊と選句用に配布する作品を一句ずつ照合するという膨大な手間を掛けて頂いています。このようなミスは皆様方が真剣になって確認作業をして頂ければ回避できるものと思われまふ。そこで、改めて会報係からお願ひです。短冊に書かれた句と選句の為に投稿される句に齟齬が無いよう、今後今まで以上に充分ご注意下さいませよう、お願い申し上げます。

従来会報一頁の選者吟の表記は、毛筆的な字体である「HG 正楷書体」というフォントを使っていました。旧漢字を使われた場合にうまく表記できない事が分かりました。つきましてはお二人の選者のご諒解を得て、前回会報よりMS明朝体で表記させて頂く事と致しました。文字は少し風情が無くなりますが御諒承下さい。例会後皆様方より色々な話題が出て、楽しい会となりました。